

聖書:ダニエル書7章16～28節

説教:幻を心にとどめる

はじめに

紀元前605年、まだ少年であったダニエルは故郷のエルサレムから主だった王族の人々とともにバビロンに補囚というかたちで連れていかれ、歴代の王たちに仕えるなかで、ときには獅子の穴に投げ込まれながらも信仰を守り通していくという試練に出会いながらも、そのようなダニエルの信仰を見てネブカドネツアル王とメディア人ダレイオスは、神をあがめて信仰者となっていきます。まとめれば、6章まではそのようなダニエルの華々しい活躍が書かれていると言うことができるでしょう。

ところが7章に入ると様子が一変します。ベルシャツアルの元年、ダニエルはある夜見た夢と幻に非常におびえる。なぜだろうかと思うわけです。前回、そのことに関して、ダニエルが最も知りたかったことが幻には示されなかったためであると述べました。いったい何を知りたかったのか。このように考えるとわかりやすいでしょう。私たちはいまコロナという目に見えない病気に囚われている状態とも言えます。いつになった前のような生活に戻れるのか、マスクも息苦しいですが、この先のことがまったく見えてこない息苦しさや不安を覚えています。ダニエルはそれ以上です。補囚となって外国に連れて来られたイスラエルが将来がどうなるか、そのことを知りたいと願いながら、答えが与えられず苦しみます。幻を与えられながら、それでもどうしてダニエルは悩むのか。そこに目を留めながら、神の救いのご計画について考えていきます。

1 ダニエルが見た幻

1) 第四の獣

幻に登場する四つの獣のうち、ダニエルはその中でも特に大言壮語する口を持った四番目の獣に興味を持ったようです。21節にこう書かれています。「私が見ていると、その角は聖徒たちに戦いを挑み、彼らに打ち勝った。」クリスチャンは大きな迫害に会い、負けてしまう。もっとはっきり言えば殺されてしまうかもしれないのです。穏やかではありません。これはなんのことか。ダニエルはそのことを知りたいと願い、傍らに立っていた一人の人に質問します。この一人の人とは、ここでは名前は伏せられていますが、8章で明らかにな

る御使いガブリエルと思われます。ガブリエルは、第四の獣はしばらくの間いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ますと説明してから26、27節でこう語ります。「しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」

2) 動揺して顔色が変わった

私たちはこれを聞いて安心します。確かに聖徒たちはしばらくの苦しみに会うけれど、最終的には神の国が打ち立てられて、聖徒たちはそれを受け継ぐことになる、そこに希望を見いだすことができる。ところがダニエルは違います。28節。「ここでこの話は終わる。私ダニエルは、いろいろと思い巡らして動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。」

どうしてここまで動揺してしまうのか。聖書は大げさに書いてあるけれど、実はちょっと不安に思っただけのことだった、ということでしょうか。

3) 動揺するベルシャツアル (5章5, 6節)

そこでまずダニエルの動揺がどの程度のものであったのか、そのことを確認します。手がかりは5章にあります。少し話しが複雑になって申し訳ないのですが、7章はベルシャツアルの元年にダニエルが見た幻の話です。5章は、ベルシャツアルが殺される年ですからダニエルが7章で幻を見てからおよそ14年経ったとき、それが5章の話であることに注意してください。ベルシャツアルは父がエルサレム神殿から持って来た金の器で酒を飲み交わし、異教の神々を賛美したとき、ある事件が起きます。5章5、6節を読みます。「ちょうどそのとき、人間の手の指が現れ、王の宮殿の塗り壁の、燭台の向こう側のところに何かを書き始めた。王は、何かを書くその手の先を見ていた。すると、王の顔色は変わり、いろいろと思い巡らして動揺し、腰の関節はゆるみ、膝はがたがた震えた。」

このあとダニエルが呼ばれて、壁に書かれた文字の意味が説き明かされ、その夜ベルシャツアルは殺されてしまいます。ベルシャツアルの様子とダニ

エルの様子を比べてください。ことばの順序が逆になっていますが、「顔色が変わった」というのと、「いろいろ思い巡らして動揺した。」まったく同じフレーズが繰り返されています。これは何を意味するか。ダニエルはあのベルシャツアルと同じように、がたがた震えるくらい絶望してしまった。そこまで追い込まれてしまったということです。

4) なぜ?

不思議に思うでしょう。ダニエルの見た幻は、永遠に続く神の御国が建てられて聖徒たちが相続する、そのようなハッピーエンドで終わっている。そこに目を留めたら、がたがた震えるような話してはまったくくない。ダニエルの動揺ぶりは私たちの目には異様に見えます。何か切実な理由があるのでしょうか思えません。それはなんであったのか。そのことを考えていきます。

2 補囚となったイスラエル

1) 悲しみ

イスラエルはバビロンの手によって滅ぼされ、神殿は荒らされ、人々は補囚となって外国に連れて行かれる。そうになったのは、南王国のマナセという王が神に逆らったためであることをダニエルも知っていました。すべて自分たちの罪のためにこうなったのですからだれにも文句は言えません。そのことは理屈ではわかって、悲しみがなくなるわけではありません。バビロンに連れて来られた人達がどんな思いでいたのか、その時の彼らの気持ちに詩篇137篇に記されています。1節。「バビロンの川のほとり そこに私たちは座り シオンを思い出して泣いた。」

2) 神の約束は取り去られたのか

約束の地を追われたイスラエルはこれからどうなるのか。もう帰ることはできないということでしょうか。もしそうなら、一つの問題が持ち上がるのです。神は自分たちの先祖であるアブラハムにこう約束しておられたのではないか。創世記17章8節。「わたしは、あなたの寄留の地、カナン全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

この約束のみことばはどうなるのか。ダニエルは補囚としてバビロンに連れて来られた日からずっと、その答えを探してきました。

3) 「聖徒たち」とは誰のことか

ダニエルは幻の中にその答えを見つけようとし、そうしたら永遠の御国が建てられ、いと高き方の聖である民に与えられるのだと説明されました。これは喜ぶべきことのはずです。ところが彼はなぜか反対に絶望してしまう。

鍵は「聖徒」ということばにあります。「聖徒」とはいったい誰のことか。もちろんイスラエルのことと誰もが思います。でもイスラエルは神に逆らいさばきを受けたままです。もう聖徒と呼ばれる資格はありません。そう考えざるを得ない。

またもう一つの可能性がある。幻によれば、この聖徒たちは大言壮語する口を持つ第四の獣によって殺されてしまうのです。そこでダニエルは考えた。これはまさしく自分たちイスラエルのことではないのか。では、27節どうなるのか。「聖徒である民たちに与えられる。その御国は永遠の国。」この聖徒とは、イスラエルは第四の獣に殺されたのだから、27節の聖徒はイスラエル以外の異邦人のことではないか。現にネブカドネツアル王も信じたのだから、そうに違いない。そのように考えた可能性もあります。

3 神の救いの計画

1) 回復の約束

とにかくダニエルは、イスラエルが神の御国を相続できないと考えて絶望し、顔色が変わるほど動揺してしまいます。

話しがそこで終わったのなら、ダニエル書がかかれた意味は何もありません。もちろんここで終わるはずはありません。9章のところでダニエルは、エルサレムの荒廃の期間は七十年であることをエレミヤ書から教えられ、そのために油注がれた方が断ち切られていくということまで明らかにされる。イスラエルはさばかれて終わりではない。主の十字架を通して赦されて、ふたたび約束の地を相続する資格を取り戻すことになる。そのような道があることを教えられます。しかし、それは自動的に戻るものではありません。イスラエルが赦されていくために、神はある一人の人を要求するのです。それはいったい誰なのか。

2) 66年間待つ

9章のところで詳しく触れることとなりますが、先取りして言います。彼はエルサレムが回復されることを知らされたとき、神を礼拝してこう祈ります。「私たちは罪を犯して、悪を行いました。」まさしく神が求めていた祈りはこれでした。神はダニエルがこのように祈るのを待っておられた。ダニ

エルにとってこの66年間は、決して意味のない苦しみではなかったことになる。悩みのなかで、彼はいつの間にかイスラエルの救いのために祈る者にふさわしく整えられていたとすることができるのです。

私たちにも同じことが言えるでしょう。たとえいま目の前に苦しみがあったとしても、この先どうなるのか真っ暗で不安が募る場面があったとしても、行く先のない道をさまよい歩いているのではないということになる。神が私たちと共に歩んでくださるといふのなら、意味のない道を歩ませるでしょうか。むしろ、あなたが歩んできた道はこのような大切な意味があったのだと、いまはわからないけれど、後になって知るときが来るということではないのか。私たちが神の国にあずかる日、それを知らされ、私たちは神の豊かなご計画を初めて目の当たりにし、神をあがめることになると信じられるのです。

イスラエルは神に逆らい、厳しいさばきを受けました。でもそれで終わらなかった。なお神はイスラエルを愛し、ダニエルを立てて、回復の道を備えてくださり約束の地に戻そうとして、こころを砕いてくださっていた。これが私たちの神なのです。そのような主のあわれみを覚えます。